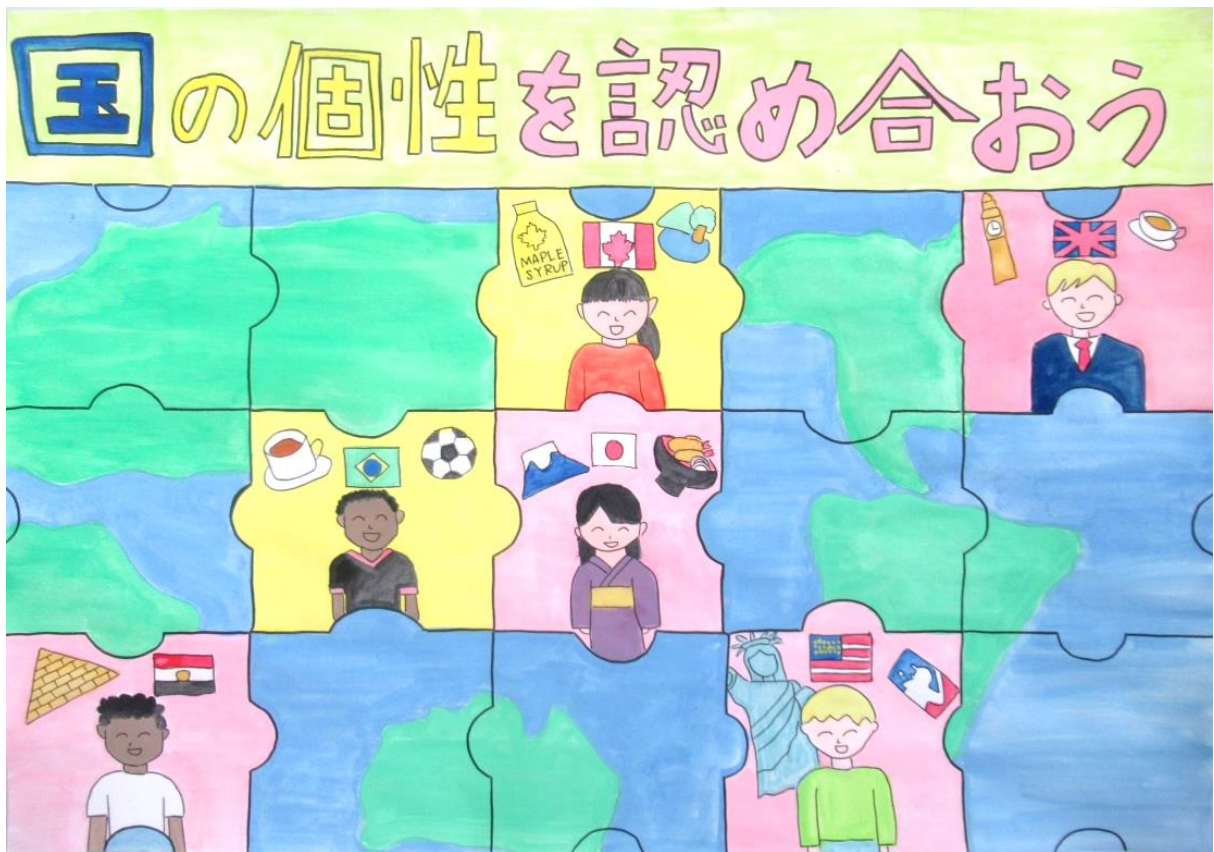


令和5年度作品集



第23回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立愛国小学校6年 黒滝 琴音 さん

釧路市平和都市推進委員会

＜ 目 次 ＞

【第23回平和絵画コンクール】

最優秀賞	愛国小学校 6年	黒 滝 琴 音	1
優秀賞	愛国小学校 6年	村 井 咲 月	
優秀賞	愛国小学校 1年	笠 島 綾 人	2
優秀賞	阿寒湖義務教育学校 5年	小 林 美 陽	
優秀賞	愛国小学校 2年	柴 田 千 星	3
佳作	愛国小学校 6年	岡 村 愛 菜	
佳作	新陽小学校 6年	吉 沢 由 貴	4
佳作	愛国小学校 4年	宮 崎 由 奈	
佳作	音別小学校 2年	池 田 梨 音	5
佳作	鶴野小学校 2年	島 崎 斗 碧	
佳作	鳥取西小学校 2年	下 山 真 空	6
佳作	鳥取西小学校 1年	村 上 すみれ	

【第36回平和図書読書感想文コンクール】

最優秀賞	青陵中学校 2年	澁 谷 茉 奈	あの日の空の色	7
優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9年	青 戸 愛 唯	過去を乗り越える	9
優秀賞	共栄中学校 3年	竹 田 妃 織	長崎の鐘	11
優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9年	輪 湖 史 幹	夢とは～出口のない海を読んで～	13
佳作	山花中学校 3年	竹 内 結 月	感情を感じられるのは。	15
佳作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9年	高 岡 咲 良	Person To Person ～人から人へ～	17
佳作	桜が丘中学校 3年	藤 井 愛 花	願う	19
佳作	共栄中学校 3年	嵐 伊紗那	当たり前	21
佳作	共栄中学校 3年	多津美 太 一	平和のバトン	23
佳作	音別中学校 2年	轡 田 華 音	戦争について知ったこと	25

【第22回平和の主張コンクール】

最優秀賞	釧路北陽高校 3年	佐 藤 改	平和のために	27
優秀賞	釧路北陽高校 3年	松 浦 士 桐	戦争がなくなるためには	29
優秀賞	釧路北陽高校 3年	山 口 果 鈴	北海道と第二次世界大戦	31
優秀賞	釧路北陽高校 3年	篠 塚 咲 希	平和とは何か	32
佳作	釧路北陽高校 3年	北 田 咲 良	1人1人の平和	34
佳作	釧路北陽高校 3年	山 口 元 馨	平和であることに感謝	36
佳作	釧路北陽高校 3年	阿 部 隼 人	平和な生活とは	38
佳作	釧路北陽高校 3年	三 原 大 知	戦争のない世界をめざして	40
佳作	釧路北陽高校 3年	宮 木 美 羽	戦争と平和について	42
佳作	釧路北陽高校 3年	早 坂 貴 浩	戦争と平和	43



第23回平和絵画コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）愛国小学校6年 黒滝 琴音



第23回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）愛国小学校6年 村井 咲月



第23回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）愛国小学校1年 笠島 綾人



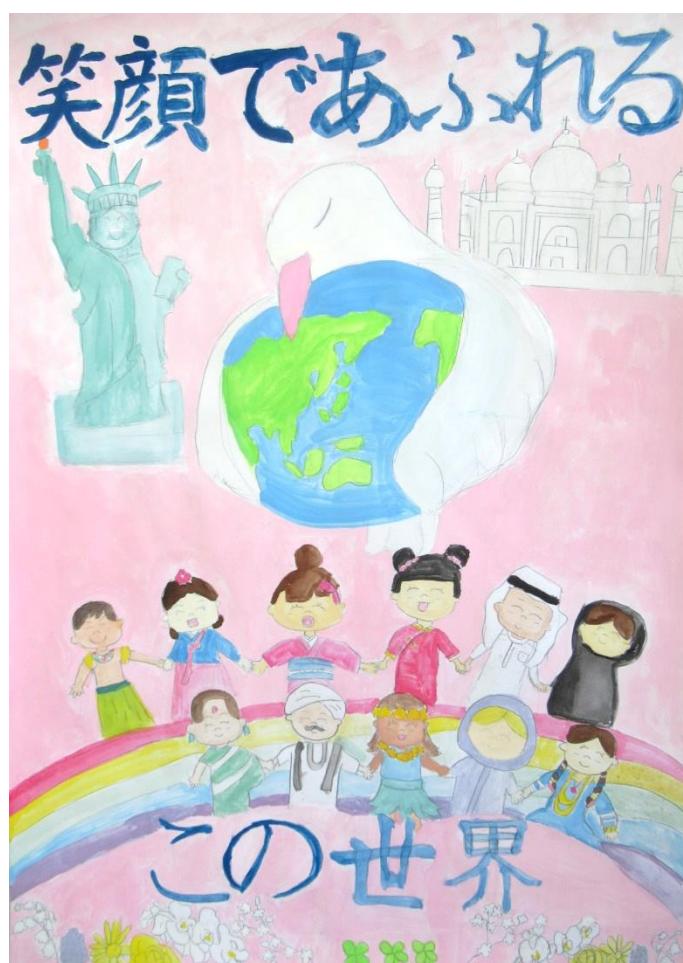
第23回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）阿寒湖義務教育学校5年 小林 美陽



第23回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 愛国小学校2年 柴田 千星



第23回平和絵画コンクール

佳作 愛国小学校6年 岡村 愛菜



第23回平和絵画コンクール
佳作 新陽小学校6年 よしざわ ゆき
吉沢 由貴



第23回平和絵画コンクール
佳作 愛国小学校4年 みやざき ゆうな
宮崎 由奈



第23回平和絵画コンクール
佳作 音別小学校2年 池田^{いけだ} 梨音^{りお}



第23回平和絵画コンクール
佳作 鶴野小学校2年 島崎^{しまざき} 斗碧^{とあ}



第23回平和絵画コンクール
佳作 鳥取西小学校2年 ^{しもやま} 下山 ^{まそら} 真空



第23回平和絵画コンクール
佳作 鳥取西小学校1年 ^{むらかみ} 村上 すみれ

第36回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

あの日の空の色

釧路市立青陵中学校 2年 ^{しぶや} 澁谷 ^{まな} 茉奈

『空は今 何色ですか あの日と同じように』

山崎朋子作詞作曲の合唱曲『空は今』はこう始まる。私達の学級は昨年の合唱祭でこの曲を選んだ。合唱練習の始めに、音楽の先生からこの曲が長崎の原爆に寄せて作られたということを聞いた。歴史で習ったこととしては知っていたが永井隆先生の存在や、「あの日」青かったはずの空で何が起こったのかはなんとなくしかなかった。

そこで私はこの『長崎の鐘』という本を読んだ。この本は「被爆体験記録」として、当時長崎医科大学に勤めていた永井先生が遺したものだ。読んでみて、まずは想像を絶する被害に驚いた。

『まるでこの世のものとは思われぬ』

投下直後の様子として文中で永井先生もこう述べているように、身元もわからず原形すらとどめていない無念の死を遂げた人々、水を求める焼けただれた人々であふれかえった「あの日」の街は、今私が想像している何倍も何倍もむごかったのだろうと思う。第二次世界大戦での核兵器の使用、日本が唯一の被爆国であること。ひとつの「過去」としてノートに板書を写していた自分の捉え方がいかにぬるく甘かったのか、「あの日」のことだけでなく「戦争」自体をただただ知った気になっていただけなんだと思い知った。

『器械はあと回し。人間を救い出そう』

この永井先生の言葉から受けたのは、あの時代を生き抜いた人々の強さだ。例えば救護を行う医療隊。自分が無傷で元気だから手当している訳ではない、だれかが救わなければいけないのだ。どれだけつらくても自分達の役割を全うし、支え合って懸命に生きようとする人々と、合唱曲『空は今』の歌詞が重なった。

『ここで生きているんだ ここで生きていくんだ 希望が 明日を照らしている 今』

今日一日を生き延びるのも大変だった状況からだんだんと原子爆弾の実態が明らかになり、さらには原子病についても声をあげる永井先生達医師の姿や、この地で生きようとする全ての人々の志。今までは「戦争」と聞くと、昔起こったかわいそうな話、「悲劇」などという印象の方が大きかった。しかし、この「悲劇」をただの「悲劇」で終わらせてはいけない、「生きていくんだ」と固く決意をした人々の存在と抱いた希望を、忘れてはいけないと今では強く思う。

昭和二十年八月九日は快晴無風。いつもと変わらない朝を迎えた。造船所や製鋼所、兵器製造工場などが集まる日本軍の重要都市である長崎に原子爆弾が投下されたのは十一時二分。七万人を超える人々が無残にも命を落とした。

現在、原爆落下中心地には世界恒久平和への願いを込めた平和公園がある。その中には被爆者の霊へ水を捧げる平和の泉、亡くなった方々の冥福を祈る長崎の鐘、市民の願いを象徴する平和記念像などが設けられている。像の台座の裏には「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」と作者の言葉が刻まれた。

原爆の脅威に立ち向かい、明日への希望を持ち続けた人々。平和を願い犠牲者の冥福を祈る臉。そしてあの日の空の色も私達は全て伝え続けていかなければいけない。

書 名：「長崎の鐘」（著 者：永井 隆）

第36回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

過去を乗り越える

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{あおと}青戸 ^{めい}愛唯

ジャンケンにはグー・チョキ・パーしかないのに、一〇〇パーセント勝つ方法はない。理不尽だけど、何か手っ取り早く決める心理戦として用いてきた人は多いだろう。喧嘩をジャンケンで止めてはならないのと同じように、戦争を解決の最終手段にしてはならない。

一九四五年八月、日本に二度も原子爆弾が投下され、甚大な被害がもたらされた。当時、長崎市にあった建物のおよそ四割、広島市にあった建物の九割が全壊。爆風に巻き込まれた多くの人々の皮膚は強烈な熱線によって焼けた。一命を取り留めたとしても、被爆の苦しみは一生続き、体の傷も心の傷も癒えることはない。そのうちの一人に、谷口稜暉がいる。谷口氏は一六歳のときに自転車での郵便配達中に爆心地近くで被爆。重傷を負うも、奇跡的に生き延びることができた。病院での治療中に撮影された『赤い背中』と題された写真は世界的によく知られている。うつ伏せになった谷口氏の真っ赤な背中が、時代を超えて原子爆弾の脅威を物語っている。そんな谷口氏の凄惨な人生を表す一冊として『THE POSTMAN OF NAGASAKIー長崎の郵便配達ー』がある。著者である元米空軍軍人のピーター・タウンゼントは、戦時にエースパイロットとして戦争に加担した自責の念から、谷口氏と親交を深めて書き起こした。谷口氏の強い生命力や、戦争の生々しさを感じることができる作品であった。現在、核保有五カ国の言語で翻訳し出版する活動が進められている。私は英語版を手にとってみた。言語が違っていても、長崎市の当時の街並みや第二次世界大戦の悲惨な様子は、十分に読み解くことができた。言語や文化の相違でどのように読まれ方が変わるのかを考えることは、これからより深く学んでいきたいことのひとつだ。

昨年、私は長崎市を訪れて被爆者体験談を聴く機会に恵まれた。語り部の方が涙ながらに自分の苦い経験を話していたのが今でも忘れられない。「自分が生まれ育った街が一瞬で壊れるのを目の当たりにした恐怖」「直前まで他愛もなく話をしていた家族や友達が、いとも簡単に奪われた恐怖」それらを再び思い出しながら、辛い経験を口に出す恐怖は計り知れない。

私は山王神社にある『被爆クスノキ』に圧倒された。原子爆弾による熱で焼け焦げながらも、この世に六〇〇年も生き続けている強くたくましい木である。二本の木は喋らないのに、見ただけで当時の場所に連れ去られるようだった。六〇〇年前か

ら変わらぬ場所で時代の移り変わりを見守ってきた木は、どんな気持ちで立っているのか。

そんなとき『どうぶつ会議』という絵本に出会った。「どうして戦争は起こってしまうのだろう？」という素朴な疑問に焦点が当てられている。戦争を許せない動物たちが、人間の世界の戦争をなくすために会議をする。大人が起こした戦争や食糧危機で犠牲になるのは罪のない子ども。「大事なのは子どもだ。子供たちのために平和を実現しよう」と、子供たちを大人の見えない場所に隠して戦争をしないよう人間と約束をする。この本を読み終えたとき、私は「現実の世界にもこんな勇敢な動物たちがいたら、私も会議に参加したいのに。」と思った。

人間はどうして同じ過ちばかりを繰り返しているのだろう。答えはきっと「過去に起こった戦争の恐怖」を語り継ぐ人が圧倒的に少ないからだ。被爆者の平均年齢は八四歳を超えた。でも、それ以上に「あの日のことを思い出したくない。」という人々が多いのであろう。

もう一つ、戦争の裏側を描いた重要な本として『暁の宇品―陸軍船舶司令官たちのヒロシマー』がある。海軍が持つべきはずの船を陸軍が持つという異常事態。それなのに、「ナントカナル」と無謀に突き進んでいった陸軍の最悪の流れが綴られている。この本の中に「日本に原爆を落とす価値はなかった。」という一文がある。これは、すでに街は度重なる空襲で滅ぼされていた、という意味だ。「権力が欲しい。実力を世界に認めてもらいたい。」という欲望が、数えきれないほどの人々の生活を狂わせたのだと感じた。

争いとは、互いの欲望がぶつかった結果だ。人間は誰だって、自分に都合の良いことを優先したがる。けれども、互いを尊重し合えば平等にすることだってできる。そんな世界になったらいいな、と心の底から思う。口に出した言葉も、相手の感情も見ることとはできない。でも、心がなければ喧嘩をすることさえできない。だから、目に見えるものよりも目に見えないものを大切にすることが、何よりも大切なのだと思う。

残酷な歴史を変えることはできないが、この先も日本が最後の原子爆弾投下の地であり続けるよう、祈り続けたい。

書 名：「THE POSTMAN OF NAGASAKI」（著 者：ピーター・タウンゼント）

第36回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

長崎の鐘

釧路市立共栄中学校 3年 竹田 ^{たけだ} ^{ひおり} 妃織

「ああ、竹槍と原子爆弾！これはなんという悲惨な喜劇であろう。」

私はこの文章を読んだ時、衝撃を受けて涙が出そうになった。

この作品は、戦争中ではあるものの、いつもの毎日をいつものように暮らしている人々が、一瞬で全て破壊され、そこから再建していく描写が細かく記されている体験記録である。

悲劇のその直前から文章は始まる。いつも通りの美しい金毘羅山、人々が朝食を用意するため建物の煙突から挙がる煙の数々、舞台である医大で始まる授業、そんな中、突然の「ぴか」によって、日常は消え去ってしまう。

語り部である永井教授は、原子爆弾がぴかっと光り、伏せようとする間もなく体が宙に吹き飛ばされ、窓ガラスの破片に襲われて怪我をしてしまう。部屋にあったベッドや椅子、戸棚、靴も服も何もかもが爆風で叩き壊され、床に倒れている体の上に積み重なってしまったため、そのまま助けを待つことになる。

その一瞬によって沢山の人が死んでしまった。隣で喋っていた人が次の瞬間亡くなっている。いつもの空襲だと思い、防空壕へと向かった外にいた人達はほぼ全滅。青々としていた山々や街並みも消え、景色一面何も無くなってしまった。それに混ざって数えきれない程の裸体の死体。その描写に「地獄だ、地獄だ。」とある。その言葉に、想像しうる全ての凄惨な状況が込められていると感じた。

助けたいのに、目の前で次々と友人や生徒、先生が命を落としていく。生き残った人々がショックを受けながらも、力を合わせて救える命を救っていく。永井教授は、自身もこめかみの動脈をガラスに切られて出血しているため、「あと三時間は私の身体も持てるだろう。」と時々自分の脈の強さをたしかめつつ患者の処置を続けた。爆弾の飛来物による火事によって、医大も全て燃えてしまった。避難した畑の上からその景色をみんなで見た時、絶望で座り込んでしまう。

次の日、永井教授は、敵機の撒いたビラによって原子爆弾が落とされたことを知る。原子野を徘徊中に竹槍を見つける。拾って空に構えて涙が出た、とあり、ここで冒頭の文章に繋がる。竹槍と原子爆弾という歴然とした力の差。勝てるわけがない一方的な殺りくであった事へのやり切れない悲しみが表現されていた。

永井教授もまた、被曝してから六年後、四十三才で亡くなってしまった。

私はこの作品を読んで、これまでニュースや戦争の記事で知っていた原子爆弾の知識がとても浅かった事に気付いた。原子爆弾は、その一度だけで、まず何万人も殺傷し、その後も放射能によって数えられない程の死者を出す。家族をバラバラにして、今ある幸せを一瞬でぶち壊す、この世に存在してはならない悲劇の塊だと思う。

また、この時生き残った人々が、使命とばかりに自分の命を投げ打って他の人をどこまでも救おうとする様子に感銘を受けた。自分が同じ立場であったら決して同じ事は出来ないと思う。

現在でも地球上では常に戦争が起きており、特にウクライナとロシアの戦争では核の危機も隣り合わせだ。自分にできることは、正しい情報と知識を得ることと、核の恐ろしさを忘れないことだと思う。

平和を願う「長崎の鐘」の音が永遠に響き渡る事を願ってやまない。

書 名：「長崎の鐘」（著 者：永井 隆）

第36回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

夢とは～出口のない海を読んで～

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{わこ}輪湖 ^{ふみき}史幹

「俺はな、回天を伝えるために死のうと思う。人間魚雷という兵器が、この世に存在したことを伝えたい。」

これは、ある学生が発した“夢”である。皆さんには、夢はあるだろうか。学生ならば、志望校や将来の夢、夢中になっている趣味などに気持ちを向けているだろう。しかしながら、「出口のない海」の主人公は、僕と同じ学生であるにも関わらず、戦争という闇に翻弄され、青春と“夢”を奪われてしまったのだ。

並木浩二は、元甲子園優勝投手だった。大学に入学後も野球部に入部し、誰からもエースとしての活躍を期待されていた。そんな中、太平洋戦争の兵役として召集されることになった。それまで共にチームとして戦ってきた仲間達との最後の試合後、“いつか自分にしか投げることのできない魔球を作る”という夢と、仲間から寄せ書きしてもらったボールと共に、並木は訓練に旅立った。

軍隊での訓練は過酷なものであった。特に並木が志願した部隊では、特殊兵器である人間魚雷回天が配備されていた。それは乗った瞬間に死を約束されるような兵器だった。そんな恐ろしい兵器に搭乗する直前、並木は故郷へと帰省し、わずかな時間を家族と過ごした。

部隊に戻り、いざ出撃というとき、並木の乗る船がアメリカから攻撃を受け、出撃することができなくなったが、攻撃を免れた一機に乗った仲間が出撃し、数分後、大きな爆発音をあげた。その後、並木達が乗った船は、静かに基地へと戻った。しばらく時間が過ぎ、回天の操縦訓練が行われた。しかし、並木の船が行方不明となり、次の日海に浮いていた回天には並木の亡骸と、“魔球完成”と書かれたあの時のボールが残されていた…。

僕がこの中で印象に残った場面は、並木が出撃直前に帰郷した際の、弟の言葉である。「どうかお国のために立派に死んでください。」まだ幼い子供が、立派に死んでくれと兄に願う姿が、僕としては考えられなかったからだ。他にも、並木の仲間達は出撃前に

「早く死んでやる。」

などと口にしてはいたが、死に対しての恐怖はなかったのだろうか、疑わざるを得ない。並木も、初めこそ死に対しての恐怖感を持っていたが、過酷な軍隊生活や戦時下

を目の当たりにし、国のために死ぬるのならば満足だという考えに変化していったのも不思議でならなかった。

しかし、ここで冒頭に書いた並木の言葉に戻るが、国のために死ぬことが満足なのではなく、後の世界に回天という恐ろしい兵器があったことを伝えるために犠牲になることに対する思いなのではないかと自分は考えた。

自分がこれまで考えてきた“夢”とは自分の思いを達成させることであり、それは犠牲になることとは全く違う。しかしながら、並木の夢は、野球部のエースとして魔球を完成させることから、仲間の死や過酷な戦況を経ていつの間にか“戦争の恐ろしさ”と平和の尊さを伝えることへと変化していったのではないだろうか。だからこそ、死への恐怖感よりも、後の世界への希望、そして“夢”が勝っていたからこそその満足感につながっていたのではないだろうか。

僕はこの本を読み終え、自分の“夢”について考えた。その夢は、自分のための“夢”である。誰かのためではない。しかし、今から七十八年前には、そんな“夢”すら追うことのできなかつた時代があったことを知り、改めて自分の夢を大切にしたいと思った。並木のように、夢に向かってしっかりと進んでいきたい。

書 名：「出口のない海」（著 者：横山 秀夫）

第36回平和図書読書感想文コンクール

佳作

感情を感じられるのは。

釧路市立山花中学校 3年 ^{たけうち} 竹内 ^{ゆづき} 結月

『広島市は瞬時にして地球上から消えた。』一見落ち着いているのに、とてつもない恐怖を感じる文章が他にあるだろうか…。この文章は、私の読んだ本の一文だ。たくさんの人が亡くなった、広島市の原爆投下の瞬間を表した文章である。

『原爆投下』と聞くと、貴方はどう思うだろうか。私は、「醜い」、「怖い」という単純なイメージしか無かった。こんなイメージを壊したのが、冒頭の文章だった。著者は原爆投下後の事を「死」、「恐ろしい」、「悲惨」などの直接的な言葉を使わず『地球上から消えた』と隠喩を使い、恐ろしさ且つ悲しさを全てひっくるめて『消えた』という言葉で表現した。この文章を読んだ瞬間に心が掴まれ、目が離せなくなった。『消えた』という言葉の言葉ほど、たくさんの意味が込められた、深く、悲しく、切なく、恐ろしいものはないだろう。

一瞬にして何十万人もの未来を奪った原爆。私は、それを目にしたことはない。そして、目にすべきではないもの。そして何があっても一生使ってはいけないものだ。私たちが当たり前に感じてしまう、『明日』に希望を持っていた人々は、皮膚がただれ水を求めて歩き回り、苦しみながら消えていった。更に子孫にまで病気をもたらし、呪いとなってしまった。直接被害を受けていなくても、一生気にして生きなければならない。結婚も、出産も。それはやはり『呪い』だろう。たくさんの人々の人生を崩していく。そんなものは絶対に使ってはいけない。

もしそこに自分がいたら…と想像するだけで恐ろしい。一瞬にして消え去ってしまった希望のある未来。辛く、苦しい姿になってうろつく人々。その光景は、まさに『地獄』だろう。だが、その恐ろしさを、日本人が忘れ去ってはいけない。

戦争といえば、今も続いているロシアとウクライナの戦争。侵攻開始から一年が過ぎ、双方の国では既に何万人も亡くなっている。そんな中、プーチン大統領が核を使うのではないかと、言われている。

もし、ウクライナに投下されたらどうなるか。更に人々は苦しみ、一九四五年の日本と同じように地獄となるだろう。そんな事は、二度と起こしてはいけないのに…。どうか投下されず、一刻も早く戦争が終結してくれることを願う。

嬉しい、悲しい、楽しい、辛い。今生きているほぼ全員が感じたことのある感情ではないだろうか。だが、この感情もいつまで感じていられるか分からない。何十年か後？

一ヶ月後？もしくは、「今」かもしれない。一九四五年の日本のように。それを考えると、今生きているだけでとても幸せだったのだ、と気付かされた。

私はこの本を読んで、『今』を大切に、平和に感謝しながら生きていこう、と改めて思った。辛いことがあっても、悲しいことがあっても、それを感じられるのは『今』までかもしれないから。

書 名：「日本のいちばん長い日 決定版」（著 者：半藤 一利）

第36回平和図書読書感想文コンクール
佳作

Person To Person～人から人へ～

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{たかおか}高岡 ^{さくら}咲良

一九四五年八月六日、広島に原爆が投下された。三日後の八月九日には長崎にも原爆が。原爆は、アメリカが作った爆弾で爆発すると強い爆風や熱線、放射線が出る。すぐ近くにいた人は、体が溶けてなくなっていたり、ひどい火傷を負った。放射線をあびた人は生き残っても、がんなどの病気や原爆症に苦しめられた。

広島に原爆が投下された時、「憎しみを乗り越えて」の主人公である近藤紘子さんは生後八ヶ月だった。被爆者を身近に感じて育ったため、原爆の恐しさをなんとなく理解していた。子供の頃、近藤さんは原爆を落とした爆撃機B29の乗組員を恨んでいた。しかし、あるとき乗組員だったキャプテン・ルイスに会う機会があり、自分がしたこと重さに涙を流す姿を見て「この人もずっと苦しんでいたんだ。憎むべきなのは、この人じゃない。」と気づいた。そして「人を憎むのではなく、憎むべきは核兵器や戦争そのものである。」と考え、近藤さんはいろいろな場所で講演活動をし、このことを多くの人に訴えてきた。

長崎に原爆が投下された時、「ゲンバクと呼ばれた少年」の主人公、中村由一さんは二歳十ヶ月だった。浦上町に住んでいて、焼け果てたため引っ越した。「被爆者」という理由で小学校でいじめを受けた。また、浦上町が「非差別部落」だったため、就職するのが難しかった。就職できても、足に大火傷を負っていたため思うように動けず苦労したこともあったという。

中村さんは二つの誕生日を持っている。一つ目は、中村さんのお母さんが中村さんを生んだ日。二つ目は、原爆が投下された日。二つ目の誕生日を境に、中村さんはしばらくの間、言葉を喋ることができなくなり、歩けなくなり、兄弟もいなくなって、住む場所も失い、そして記憶そのものをなくした。原爆は中村さんにとって、リセットボタンだった。小学校で原爆は恐ろしいもので、大きな被害が出たということを学んだ。しかし、あまり詳しくは知らなかった。今回は、被爆者がどのようなことを思ってきたのか、どのような困難があったのか、どういう思いで現在講演活動をしているのか少し知ることができた。

これらの本を読んで、改めて戦争は起きてはならないと思った。なんの罪もない大勢の人が苦しみ、多くのものを失うからだ。多くの人の人生を大きく変えてしまうからだ。戦争は物理的だけでなく、精神的にも被害を受けると思う。近藤さんも中村さんも、憎

しみや苦しみ、絶望など様々なものを乗り越え、講演活動ができるようになったという。忘れ去りたい恐ろしい過去を人につたえるのは「自分達の体験を多くの人に知ってもらい核兵器の恐ろしさや戦争の愚かさを理解してもらいたい。核兵器の廃絶、戦争のない世界にしてほしい。」という強い願いを持っているからである。

ロシアによるウクライナ侵攻がはじまってから1年以上経った今もロシアの攻撃は続いている。ロシアがウクライナに向けて攻撃を始めた時、過去と同じようなことが起こるのかと不安と恐怖を覚えた。今まで戦争は過去の出来事で、自分とはあまり関係がないと思っていた。しかし、自分が暮らしているところから少し離れたところで戦争が起き、多くの人々が亡くなり、多くの都市が失われているとわかり、戦争や紛争は身近な問題だと感じた。

自分が知らないだけで、今も世界のどこかでは紛争が起きている。調べてみると、一番影響を受けるのは子供だという。子供が半強制的に兵士として紛争に参加させられたり、食料が不足するため栄養失調になったり、学校の閉鎖や難民になったことが理由で教育を受けることが困難だったりする。

簡単になくなるものではないとわかってはいるが、核兵器や戦争が無い世界になってほしい。もしかしたら、自分も紛争が起こっている地域に生まれていたかもしれない。産まれる場所が違っただけで、なんの関係もない子供が様々な被害を受けるという状況をなくしたい。今の自分にできることはなんだろうか。支援団体にお金を寄付することや戦争、紛争の恐ろしさを伝えることが自分にできることだと思う。

近藤さんは「人から人へ」という言葉を大切に活動してきた。大事なことは人から人へと伝えられて、必ず実を結ぶと信じ、希望を持ってきた。近藤さんや中村さんのように、自分にできることを少しずつでもやっていけば、いつか戦争のない世界にできるのではないか。

書名：「憎しみを乗り越えて ヒロシマを語り継ぐ近藤紘子」（著者：佐藤 真澄）

書名：「ゲンバクとよばれた少年」（著者：中村 由一）

第36回平和図書読書感想文コンクール

佳作

願う

釧路市立桜が丘中学校 3年 藤井 愛花

「何これ。本当に人なの？なんか怖いよ。」小学校一年生の頃、初めて見る展覧会の原爆写真に驚きと怖さを覚え、心臓が速く脈打っていたのを覚えている。死体の山積み、黒焦げの人々、今でも鮮明に思い出す。同じ人間なのにどうしてこんなにも残酷な目に遭わなければならないのか。同じ人間なのにどうしてここまでむごいことができたのか。

この頃から私は、母や兄に分からないところを聞きながら、戦時中の本や映画などを讀んだり観たりしてきた。本を読めば読むほど、戦争のむごさや卑劣さ、思わず目を覆いたくなるような出来事が目に見えてくる。

最初に讀んだ本「はだしのゲン」では、特に被爆した人達が水を求めて歩いているのをゲンが

「おばけじゃ。みんなおばけじゃ。」

と言って見ていたのが印象的だ。原爆は、たった数十秒でこれからの大切な未来を多くの人から奪うのだ。それに人を一瞬でおばけのようにしてしまうのだ。まるで悪魔の兵器だ。どんな理由があっても原爆を落として良い理由などない。いや、戦争すら始めてはいけないはずだ。一度始まったら後戻りできないからこそ、始めてはならないと私は心から思う。

母から第二次世界大戦中、日本兵として出兵していた曾祖父の話を聞いたことがある。曾祖父は戦争が終わっても極寒のシベリアに七年間も抑留されたそうだ。母は曾祖父からは戦争の話は一切聞いたことがなかったそうだが、母がおもちゃの鉄砲で遊んでいると、いつも優しい曾祖父に

「そんなもので、遊んではいけないよ。」

と怒られたそうだ。そのときは、皆遊んでいるのになぜと思ったそうだが、後になり祖母に話を聞いたり歴史を學んだりして曾祖父の辛さを理解したと話していた。

こうして曾祖父が恐ろしい体験をのりこえ、つないでくれた命のありがたみを忘れないためにも、戦争を決して忘れてはいけない。そのために私は、毎年八月近くになると戦争の本を讀んでる。

その中でも「いつも笑顔で」は、何度讀んでも涙失くして讀まずにはいられない作品だ。いつ何時も変わらない親の愛情。兄妹の絆。とても仲の良い九人家族だった。だが一晩にして、東京大空襲で十万人以上が亡くなった。その中に主人公の家族もいた。た

った一晩で十万人もの人が焼き殺されたのだ。こんな優しい人たちが犠牲となる戦争。二度と起こしてはいけない。世界中の人々がこのような温かい家族もたくさんいたことを考えていれば、ここまで最悪なことにはならなかったのに。それでも主人公の香葉子さんは強く生き抜いた。親や兄弟の愛情を持ち続けながら。

「ガラスのうさぎ」だってそうだ。東京大空襲で母や妹達を失くし、やっと生き残った父でさえも P51 戦闘機の機銃掃射で殺されてしまったのだ。ここでも主人公の敏子さんは「私が死んだら家族の墓参りはだれがするのか。」とふるい立ったのだ。

私だったらこの二人の少女のように立ち上がれるだろうか。とても耐えきれそうにない。だからこの二作品には心ひかれるものがあつた。とても感心した。

また、世の中が苦しい状況にあっても他人を思う気持ちを忘れない人にも感動した。皆、食料不足なのにも関わらず困っている人がいれば食料を分け与える人。今初めて会ったばかりなのに、相手の身の安全を心配して家に泊めてあげたり、その後の行方を心配したりする人。戦時中でもこんなにも素晴らしい心を持った人達がいたことに対し、少しホッとした。苦しい状況に陥るほど、その人個人の本来の姿が現れるかもしれないと思った。

長崎原爆のことが書かれている「もういやだ」では、現実を突きつけられた。原爆を浴びた人々が「女も男も半裸体で、髪は逆立ち、赤く焼けちぢれて、眉もなく、黒褐色の肌色にかわり、どの人も鬼人としか思えない形相。」という表現からは、どれほど原爆の威力がすごかったかが想像できる。この作者は、戦争により五人の子供と最愛の夫を失くした。

私は学校に毎日行き、友達がいて、三食きちんと食べられて家族と暮らせることがあたりまえだと思っていた。だが全然あたりまえの日常ではなかった。色々な本を読んだことにより、私がどれほどありがたい環境で育っているのかが分かった。

私は願う。憎しみ合うのではなく共に喜び合うことを、殺りくの兵器を作るのではなく、人を笑顔に、幸せにするものが生み出されることを。一日も早く地球上から戦争という言葉が消えることを。私達の未来が明るい希望で満ちていることを。

そして、私のこの願いが世界中の人々に届くことを願う。

書 名：「いつも笑顔で」(著 者：海老名 香葉子)

書 名：「はだしのゲン」(著 者：中沢 啓治)

書 名：「ガラスのうさぎ」(著 者：高木 敏子)

書 名：「もういやだ 原爆の生きている証人たち」(著 者：長崎原爆成年乙女の会)

第36回平和図書読書感想文コンクール
佳作

当たり前

釧路市立共栄中学校 3年 ^{あらし} 嵐 ^{いさな} 伊紗那

ガラスのうさぎ。この美しい言葉に魅かれて私はこの本を手に取りました。この本は、一九四一年、第二次世界大戦の局面の一つである大東亜戦争で、この本の作者でもある主人公、敏子の色々な疎開先での生活を中心に自身が体験した戦争について語られています。敏子には、父、母、兄が二人、妹が二人います。敏子の生まれ育った町は中小の町工場が立ち並び、毎日が活気に満ちた町でした。しかし、大東亜戦争が始まり、敗色がただよいはじめた頃、子供も大人も関係なく、徴兵令などによって兵隊に行く人は増え、食品は配給制度、衣類品も十分に買うことができない日々が続き、町に前のような活気はありませんでした。ある日、敏子は兄のおさぎりのランニングシャツに、一生懸命、刺繍をしました。しかし、日本が今、戦争をしていることを理由に担当の先生からすぐほどくように叱られてしまいます。私は、見た目までも「戦争」によって支配されていることを怖く、そして悲しく思いました。本土への空襲が始まり、敏子は二人の妹と疎開しました。当時は戦争の被害に備え、親元を離れて暮らしていました。小さい子供にはとてもつらいことだと思います。そして三月九日夜半から十日の朝にかけて東京に大規模な空襲が起きてしまいます。父は助かったものの、母と家に帰っていた二人の妹は、行方不明になってしまうのです。被害が大きかった下町にある敏子の家は焼けてなくなりましたが、金庫と家族の茶碗のかけらは残りました。そして、父の作品であるガラスのうさぎの置物は、ぐにやぐにやにとけてころがっていました。爆弾はガラスがとけるほどの熱さで、威力があったことがわかります。また、父は駅に突然降ってきた機銃掃射によって敏子の目の前で亡くなってしまいます。

私は、この本を読んで、家族は一番身近な存在だけれども、自分の命よりも大切な尊い存在であることを改めて感じました。さらに戦争によって気が狂ってしまった人や心に深い傷を負ってしまった人もいることを知り、敏子のガラスのうさぎのように目に見えるものだけが戦争の怖さ、全てではないこと、当たり前は必ずしも当たり前ではないこと学びました。

また、私はこの本を読んで、戦争について驚いたことが二つあります。一つ目は自由がないことです。徴兵令や配給制度など、毎日の生活を国や戦争に支配され、私は、国が戦争に勝つためだけに国民がいるように思えました。二つ目は死が身近であることです。これは私が戦争において、一番悲しいことだと思っています。敏子は父が亡くなっ

た時、泣いている暇などはなく、すぐに火葬やこれからの生活について考えていました。今の時代ではありえないことでしょう。しかし、これが当時の当たり前だったのならば、私はその時代へとタイムスリップし、こう言いたいと思いました。「今の日本はみんなが望んでいる社会じゃない。こんなのはおかしい。」しかし、過去に戻って過ちを正すことはできません。だから、私はこの戦争によって命を失った人たちにこう伝えたいです。「今の日本があるのも、私たちがこうして何事もなく暮らしていけるのも、みなさんのおかげです。絶対にみなさんの命を無駄にすることはしません。より良い未来のために、この出来事から学んだ、多くの悲しみも後悔も次の世代へとつなげていきます。」と。

そして、いつの日か、戦争ではなく、平和と笑顔で世界がいっぱいになりますように。

書 名：「ガラスのうさぎ」（著 者：高木 敏子）

第36回平和図書読書感想文コンクール

佳作

平和のバトン

釧路市共栄中学校 3年 多津美 太一

「授業で用語としては習った。」「遠い昔の出来事。」以前までの自分は、広島に投下された原子爆弾に対して、そのような印象しか持っていませんでした。とても残虐で、二度と繰り返してはいけない出来事だというのは分かってはいても、その詳しい被害等は分からない。現代を生きる若者の、ごく一般的な考えでした。

今回、私が読んだ「平和のバトン」は、広島の被爆者の証言を元に、高校生たちが絵に描いて後世へと残す物語を集めた本です。この本に出てくる広島の前爆についてのお話は、第四章に出てきた、「目がキラリと光って見えたため、てっきり生きていると思っていたのですが、少年は、すでに亡くなっていたのでした。」という所が、凄く残酷だと思いました。前述の分を証言した宇都宮功さんは、「彼のその姿は、今でも、何回も、何回も夢に出てきよります。」とも語っています。私も、もし、生きていると思った人が近付いてみたら実は死んでいた、などということがあったら、いたたまれない気持ちになると同時に、恐怖も感じ、深く脳裏に焼き付くことでしょう。しかし、私が今想像だけで感じた恐怖は、宇都宮さんの恐怖にしてみれば、きっと何百分の一ほどだと思っています。

また、私はこの本を読みながら、もし原爆の恐ろしさを誰にも伝える事なく被爆証言者が亡くなってしまったらどうなるのかというのを考えました。原爆というのは、一瞬にしてその人の人生全てを狂わせたり、最悪の場合、人生を終わらせてしまうものです。そのようなものはこの先絶対にあってはならないとひしひしと感じました。そのため、もし語り継げなかったとしたら、いま生きている人たちには原爆の怖さ、平和の尊さがあまり分からず、また最悪の出来事を招いてしまうことがあると感じました。カメラやビデオのない昔の日本にとって、広島の前惨な状況を記録する術というのは、被爆者の記憶が殆どなので、尚更そのような事が言えると思います。

その、被爆者の記憶を伝えるために、自分はどんな取り組みができるかについても考えを巡らせました。まず挙げられる例として、「周りの人に、広島の前爆に興味を持ってもらおう」ということがあります。当たり前だと思うかもしれませんが、私と同じくらいの年代の人達は、あまり原爆のことを知りません。私も、今回本で読んで知ったくらい知識しかないので教えてあげられる量にも限界があります。ですので、興味を持ってもらい、個人個人で自分なりに調べて、そこで得られる感想を交流するという方法が

良いと思います。それぞれ調べるので、持つ感想は千差万別です。その様な違う考えを知ることで考えはさらに深まると思います。

最後に、広島での原爆は七〇年以上前の出来事です。今、私たちの日常の中で戦争や原爆について考える機会は少ないと思います。しかし、今も戦争は世界で起こっています。戦争を経験していない私達は、実際に戦争を経験した人の恐怖や痛みは完全には知る事は出来ません。しかし、知ろうとする事はできます。現代を生きる私達一人一人が深く考え、知ろうとする意識を持つ事が、世界を平和へと近付ける第一歩だと思います。

書 名：「平和のバトン」（著 者：弓狩 匡純）

第36回平和図書読書感想文コンクール

佳作

戦争について知ったこと

釧路市立音別中学校 2年 ^{くつわだ} 轡田 ^{かのん} 華音

私が読んだ本は、長崎に落とされた原爆の話です。

読んだだけでも戦争が続く日々は、地獄そのもののように感じられました。毎日誰かが知らないうちに亡くなっていたり、食べるものが少なかったり、もしくはなかったりなど、今では想像のつかないようなことがたくさん書かれていました。

例えば、原爆が落ち一瞬で沢山の死者がでること、「ピカ」っと光る外、パニックで不思議な行動をしてしまう人など、戦争や原爆について詳しく知らない私には、想像するのが難しく、信じられないことがたくさん書かれていました。

私はこの本を読んで、心に残った表現、言葉がたくさんあります。

一つ目は、「あちらにもこちらにも『助けて……』の悲鳴が聞こえる」です。

私はこの「助けて……」の部分が、今にも力尽きそうなのに最後の力で、助けを求めているように読み取れました。この部分を読むだけで、どれほど痛く辛いことか、苦しいほどに感じました。「あちらこちらにも」という部分からは、被害にあった人は一人だけではなく、大勢いることも読み取れました。この話だけでも、本当にたくさんの方が亡くなったんだと想像できました。

二つ目は、「水、水とうめく声、死にかかってみにくくゆがんだ顔」という場面です。

この場面は映画の内容です。しかし、映画にしろこのような人たちが、当時たくさんいたことは変わりありません。この場面は、今では想像できない水に飢えている人々、顔が歪んでしまった人たちが表現されています。もちろん、私には人の顔が歪んでいる姿を想像できるわけがありません。ですが、「歪んでいる」と考えると痛々しく、自分がもしそうなったらと考えると恐怖で仕方ありません。

三つめは、「これが我が母であろうかと思う様な姿」という場面です。

この場面には、山に避難していて家に帰ったときに見た母の姿が書かれていました。この表現から、原爆によって先程の場面で書かれていたように、顔が歪んでいたりと、着物はボロボロになっていたに違いありません。たった一瞬で「自分の母なのか」と疑う姿になってしまうほど、原爆の威力の恐ろしさが読み取れました。

他にも、心に残り苦しくなった表現、場面はたくさんありました。本を読んで当時の環境、風景を知ることができました。

話の一つ一つが残酷で、痛々しく、自分が住んでいる日本でこのようなことがあった

と考えると、今の日本は平和すぎて信じられません。

そして、それぞれの話で共通していたこともありました。それは、戦争の被害を受けている人たちが大怪我をし、大切な人が亡くなってしまったことでした。どの話を読んでも必ずこの表現はありました。この表現があることで、戦争の辛さ、痛みがとても伝わってきました。

私は、本を読んで「こんなこともう二度とあってはいけない」と思いました。そのために、自分ができることは、今回のように戦争について知る事が、大切なのではないかと思います。

書 名：「もういやだ 原爆の生きている証人たち」（著 者：長崎原爆成年乙女の会）

第22回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

平和のために

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{さとう}佐藤 ^{あらた}改

昨年2月、ロシアがウクライナへの侵攻を開始してからすでに一年が経過しました。一ヶ月程度で終わるだろうと思われていたこの戦争は、誰も予想できないほど長引き、終わりも見えなくなっています。

このような事態になってしまった理由を調べてみると、政治的な対立や領土問題などさまざまな理由があることがわかりました。

しかし、私は第二次世界大戦という大きな戦争から七十五年以上という長い年月が経過し、悲惨な記憶が薄れてきていることも一つの要因なのではないかと思います。

戦争を経験した人の平均年齢は八十歳を超え、実際に戦った人は百歳を超える人も多く、私たちが大人になるころには、戦争の記憶を語りつぐ人がほとんどいなくなっているかもしれません。

太平洋戦争が終わってから今までの間、日本は一度も戦争をせず、とても平和な国になりました。しかし、かつてとても大きな戦争をして、さらに核兵器によって多くの人々が亡くなり、現在も苦しんでいる人がいるということを忘れてはいけないと思います。

最近では北朝鮮のミサイルでJアラートが鳴ることが増えるなど、かつてあれほど悲惨なことがあり、現在も多くの人々が核をなくさなければいけないと訴えているにもかかわらず、ニュースで見たり聞いたりする機会はとても増えているように感じます。

それに対して私たちは、唯一の被爆国として、核兵器の悲惨さを世界に向けて語り継いで行かなければいけないと思います。

私は戦争のつらさや核兵器について実際に経験したことはなく、詳しく知っているとさえ言えません。しかし歴史について調べたり祖父母など、実際に戦争を経験した人たちに聞くことはできます。自分一人だけで核兵器をなくすことはとても難しいですが、自分たちが昔なにがあったかを知ることが大事で、どのようなことがあったのかを忘れてしまわないようにしなければいけません。

私は中学生のとき、八月十五日に行われた釧路市民戦災死没者慰霊式に参加する機会があり、そこで花をかざったことがあります。子供の頃、なにも思わずにあそんでいた公園で、七十五年前に空襲があり、およそ二百人のかけがえのない命が犠牲になったという事実をこのときはじめて知りました。戦争はとても昔のことで、北海道は攻撃を受けていないと思っていたので、かつて釧路も空襲を受けていたことに強い衝撃を受けま

した。

日本は今とても平和で、私たちもなにひとつ不自由のない生活を送っています。しかし世界中のいろいろなところで戦争は続いていて、いつ日本がまきこまれるかもわかりません。

これからも平和に生きていくために、そして世界中が平和になるために私たちができることはすくなくですが、かつて何があったのかを知り、後の世代に伝えていくことで、戦争の悲惨さは語り継がれていき、いつの日か世界から戦いがなくなる日がくるかもしれません。この作文を通してさまざまなことを調べ、平和についての関心がとても深まったので、それをけして忘れないようにしなければいけないと思いました。

第22回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

戦争がなくなるためには

北海道釧路北陽高等学校 3年 松浦 まつうら 士郎

高校三年生になった今、歴史の授業で戦争のことをより深く学んでいます。ですが、今の日本では、戦争を経験していない人がほとんどなので知識に限界があります。それは仕方のないことです。では、どのようにすれば戦争がいかに悲惨で二度と起こしてはならないことだと現代人にも伝えられるのでしょうか。正直、私自身も身近に戦争を経験した人がおらず、学校の授業でしか教わる事が出来ません。当時の重要な出来事を文字として覚えているだけで、その中の様々な人の思いや状況を国語のように読み取れてはいませんでした。

その様な授業の受け方をこれまでしてきたのですが、ある一回の授業で戦争に対する考え方が一変しました。それは、社会の授業で見たビデオです。そのビデオは、昔のテレビ番組で、特攻隊を取り扱っていました。自らの命を捨ててまで敵国に攻撃しなければならず、生き残った人が泣きながら戦友のことを思い、語っているところを見ているととても心が痛みました。そして、その時に戦争は絶対にしてはいけないことだとより強く感じました。こういう感情にさせることが大事になってくると思います。文字では伝えきれないことを戦争を扱っているテレビ番組などを見せて知識を補い、残酷で非道なことを我々人類はこれまでしてきたかを再認識できる良い機会になります。

人はなぜ争わなければいけなかったのでしょうか。自国の発展のためや上からの命令に従ったというのが多かったと思います。本当にそうでしょうか。私は早くこの戦いを終わらせて世界が平和になるように願っていたのではないかと思います。

しかし、この願いは今になっても叶わない状況になっています。世界各地で紛争が起こっており、様々な人が犠牲になっています。その中では、子どもも犠牲になっています。子どもたちは、兵士として戦闘と他者の殺害をしなければいけないこともあり、心と身体に大きな影響を受けてしまうのだそうです。なぜ子どもまで犠牲にして今の時代に至っても戦争を続けなければならないのか私には理解ができません。今一番注目され、議論されているのは、ロシアによるウクライナ侵攻です。ロシアは自分勝手な理由でウクライナを攻撃し始めました。軍事力で圧力をかけ、言うことを聞かせる方法をとったことは、世界各国から非難されています。なので、日本や欧米の国々は、ロシアへの輸出入、お金のやりとりをやめ、経済的に孤立させて攻撃をやめさせようとしています。

このように世界中から嫌悪感を抱かれるようになったロシアですが、一方的にロシアを非難し、ロシア人を差別することはあってはいけないことだと思います。ロシアの国

民全員がこの戦争に賛成しているわけではありません。反対派の意見にも耳を傾け、ニュースでは語られなかったところを自分で調べて知ることが大事になっていくと思います。

これからの時代、戦争を忘れてはいけません。私たちのゴールは、戦争のことを考えずに生き、平和な世界にすることです。そのためにも、一人ひとりが戦争という過去の過ちを知り、国同士のトラブルも暴力的な解決方法ではなく、平和な解決方法にするように考えていかなければなりません。

第22回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

北海道と第二次世界大戦

北海道釧路北陽高等学校 3年 やまぐち 山口 かりん 果鈴

「第二次世界大戦」と聞いて思い浮かべるものは何でしょうか。多くの人が東京大空襲や原爆を思い浮かべると思います。北海道を考える人は少ないのではないのでしょうか。以前の私もそうでした。

私は北海道に戦争の被害はあまり無いと思っていました。なぜなら私の地元は戦争による被害がなかったからです。私が知っていたのは教科書に書いてあることや祖父から聞いた戦時中の学校の様子だけでした。祖父から「戦争でこんな被害があった。」と、聞いたことはありません。あくまでも被害は本土や沖縄だというイメージが強かったです。

しかし、釧路に引っ越して来てからそのイメージは間違いだったと気づきました。授業の中で戦争について調べる機会があり何となく「北海道戦争被害」と検索すると北海道空襲という文字が一番に目に入ってきました。私はびっくりしました。今まで北海道は戦争の被害とは無縁だと思っていたからです。この北海道空襲で特に被害の大きかった都市は室蘭、根室そして釧路です。釧路では七月の十四日から十五日にかけ工場や市街地に対し大規模な空襲がありました。この空襲ではこの三つの都市以外にも函館、小樽、帯広、旭川など戦略上全く意味のない農村部も攻撃され、たったの二日でその被害はとても甚大でした。もともと北海道空襲を受けるまで実被害を受けることのなかった北海道では、「実感がなかった。」という人もいたそうです。それは札幌や旭川など大きな都市に被害がなかったからです。大きな都市が大丈夫なら他の市も大丈夫とのんきな気分で半分いたところに急な空襲でしたからびっくりどころではなかったと思います。釧路の被害は大きく罹災者六千人超、死者二百人近くもでした。

今では北海道の中でも大きな市の釧路に戦争の被害があったなんて思いもしませんでした。どこか少し遠い話に思っていた戦争が一気に身近に感じました。今まで授業で聞いていたのは東京や沖縄、原爆など私にとって身近に感じられない内容でした。だから「戦争」と聞いても「第二次世界大戦は本土の方だけ」と、わかっているけど、わかっていないような感じでした。本当にわかるためには何回も何回もしつこいくらいでもたります。もう二度と過ちを繰り返さないため、戦争や平和の尊さについて考え続けていくべきだと思います。自分の暮らす地域の戦争の被害を知ることによって今ある平和がどんなに大切か改めて感じさせられました。過去を知ることによってこれからの平和につながると思います。

第22回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

平和とは何か

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{しのづか}篠塚 ^{さき}咲希

最近ニュースでよく耳にするG7広島サミット。G7サミットでは七カ国の首脳が、一か所に集まり、国を超えた協力が必要なテーマを議論します。その会議の開催地に選ばれたのは先ほどの名前の通り広島でした。広島が選ばれた理由として岸田総理大臣は「唯一の戦争被爆国である日本の総理大臣として、私は広島ほど平和へのコミットメントを示すのにふさわしい場所はないと考えている。」と述べています。

しかしながら『平和』とは一体何なのでしょう。岸田総理が言う『平和』はどういうものなのでしょう。

広辞苑で『平和』を調べてみるとまず第一に「やすらかにやわらぐこと。おだやかで変りのないこと。」と記載されています。そして第二に「戦争がなくて世が安穏であること。」と書かれています。戦争という言葉が入っていることから、岸田総理の言う『平和』は第二の意味である事が分かりますね。では戦争がない状態は必ずしも平和と言えるのでしょうか。それは違うと私は思います。平和な世界をつくるためには、広辞苑にもある通り安穏でなければいけないのです。

世を安穏にするためには、戦争に発展する恐れのある核兵器を無くす事が必要だと私は考えます。近年世界を揺るがしている北朝鮮による弾道ミサイルの発射実験。「北海道周辺に落下する可能性がある」とJアラートがなったことが何回もあります。実際に日本に落下した事はありませんが、落下する「可能性」がある以上、安全とは言えないでしょう。本当に日本にミサイルが落下した場合、世界的な戦争に発展する確率が高いからです。

また、核兵器を保有している国は北朝鮮だけではなく、他に8か国もあります。そして世界にはまだ、核をもっているのではないかとされている国々があります。つまり、人類死滅につながるような核戦争がおきる危険性は常にあるといえるのです。

日本には、太平洋戦争から七十八年たっても放射能による被害を受けている人たちがたくさんいます。放射能をあびたことによって白血病やがんの発生率が増加しました。放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ解明されておらず、調査が現在も続けられています。

核兵器は、人の身体だけではなく、人々の社会生活そのものを破壊します。家族や友人などの命を奪うだけではなく、住む場所や帰る場所、基本的な生活を瞬時に消し去り

ました。人々にとっての核兵器は、恐怖のシンボルです。世を安穩にするためにはそんなシンボルは必要ありません。そのため、核兵器は廃絶すべきだと私は考えます。

最後に、戦争や核兵器を無くすために私達にできることは、世界唯一の戦争被爆国として声をあげ続けることです。G7サミットで注目されている今がチャンスです。『平和』を世界に訴えかけましょう。そしてその中で大切なのは、「平和とは何かという問いかけをくり返して平和が揺らいでいないか常に確認すること」です。みなさんも今一度、平和とは何か、考えてみて下さい。

第2 2回平和の主張コンクール

佳作

1人1人の平和

北海道釧路北陽高等学校 3年 北田^{きただ} 咲良^{さくら}

みなさんは、もし世界が平和になるようにと考えたのなら何を願いましたか。戦争がない世界ですか、それとも差別や偏見のない世界でしょうか。平和と言っても、一人一人の理想は違います。なぜなら、平和のイコールがないからです。しかし、世界中の人々は平和を望んでいます。それぞれ違った平和を。今回のテーマは「戦争と平和」です。なので私が望む戦争がない平和について書いていきます。

まずそもそも、なぜ人は戦争をするのでしょうか。インターネットの記事によると、大きく5つに分かれるそうです。1つ目は「民族」の争いです。民族の異なる人たちが、その考えの違いから争いが起こります。2つ目は「宗教」の争いです。信じる宗教の異なる人たちが、その考え方の違いから争いが起こります。3つ目は「資源」の争いです。石油やダイヤモンドといった資源でお金を得ようと奪いあい、争いが起きます。4つ目は「愛」です。愛する者が殺されたから復讐して、その連鎖が起きて戦争します。5つ目は「領土」の争いです。国同士が領土を主張して戦争が起きます。

今の大きく分けた5つの原因を解決することができるのでしょうか。解決できるなら、とくに戦争がない平和になっているでしょう。では、どうやったらいいのか、私たちにできることはあるのか。私は、1つ目の「民族」2つ目の「宗教」は、違う考えの人でもお互いを尊重しあえれば憎むことなく、『共存』していくことが大切だと思います。共存とは、それぞれが独立して存在することを認め、お互い干渉しないことです。私たちは、たとえ異なる民族で違う宗教を信じていても批判したり攻撃することなく、そこにお互いが存在しているんだなくらいの感覚で過ごしていけばいいと思います。干渉しなければ、争いが起こらないはずです。3つ目の「資源」は『共生』が大切だと思います。共生とは、お互いに干渉・助け合いながら生きることです。経済的に、食料不足という国や人が困っているなら、余裕がある国や人が救いの手をさしだせばいいと思います。4つ目の「愛」5つ目の「領土」は、どちらかが許容しないと終わらない連鎖だと思います。お互いの主張を聞き、どこかに歩み寄れるとこがないのか探すのがいいと思います。これは、私たちは体験しないと想像しづらい問題です。しかし、普段の生活で親や友だち、同僚や上司、部下と意見がぶつかり合った時はありませんか。その時には、お互い歩み寄って解決するでしょう。これを、国や人々で実践できたらいいなと思います。

これらの大きく5つに分けた戦争の原因を解決していくのには、どうしたらいいのか

私なりに考えました。実現するのは難しいと思うし、なによりもみんなが違った平和を望んでいるかもしれません。だから、私の言っていることは違う、あなたの考えていることは間違っていると思わないで、みんなちがってみんないい。1人1人が「平和」へのイメージを持って関心をもてば戦争という暴力が、世界からなくなるのにな、と思いました。

第2 2回平和の主張コンクール

佳作

平和であることに感謝

北海道釧路北陽高等学校 3年 やまぐち はるき 山口 元馨

どのような状態が平和なのか考えたことはありますか。おそらくほとんどの人が考えたことはないでしょう。僕も、この作文を書くまでは、その一人でした。どうして、現在の日本人が平和な状態とは何かと考えないのでしょうか。僕は理由として、今の日本は「戦争のない国」になったことだと思います。しかし、戦争のない国になったのは、戦争による大きな被害を日本が受けたからです。その戦争では、広島・長崎に原子爆弾が投下され兵隊以外の女性や子ども、ご老人といった何もしていない一般市民までもが被害にあい、死者は、五十万千七百八十七人となりました。ここから、現在の日本の平和のスタートです。一九四五年八月十五日、日本はポツダム宣言を受け入れ、日本の敗戦が決まり、終戦となりました。このポツダム宣言の内容は、日本領土の制限、軍隊の解散、平和産業の維持など日本にとって不利な事ばかりでしたが、原子爆弾で大きな戦力を失ったため、この不平等な条件をのみこむしかありませんでした。この時の日本人はおそらく、戦争が終わっても平和はこない、なぜなら、アメリカ軍の人々が日本を占領すると思っていたと思います。しかし、その考えとは真逆で、国民にとっては、少し条件がよく、主権在民・平和主義・基本的人権の尊重が日本国憲法で保障され、戦争中よりも、暮らしやすい状況となったが空襲や原子爆弾により家が焼け野原となってしまったものが多かったため、戦後直後は、暮すのが困難だった。それから現在にいたるまで、地方自治法や教育基本法ができたり、政党政治が復活したり、日米安全保障条約をアメリカと結び、日本の平和は確立されてゆき、現在の平和な日本があります。しかし、近年、北朝鮮からのミサイルが飛んでくるといった事が多数あり、日本の平和維持ができるのか不安な状況があります。また、日本ではないですが、ウクライナとロシアの戦争が起きており、昔の日本と同じ状況をつくる可能性があり、今すぐにでも止めなくてはならないと僕は思います。

今回、平和と戦争について考え調べてみて僕は、今、僕たち日本人が戦争からの危険がなく平和に暮らせているのは、過去の人々がたくさんの被害を受けて亡くなり、そこから学んだ戦争への恐怖や危険度が改めて考えられた結果なんだと感じ、僕たちの先祖の人々に感謝と敬意の気持ちを忘れてはいけないと思いました。また、現在の世界の中では、昔の日本と同じような状況におかれている国々が多く存在するため、日本に生まれてこれて良かったと改めて実感したとともに、今、こうして安心安全に生活を送れていることは幸せなことだと思えました。また、戦争を行っている国々を見ていると、日

本もいつかまた戦争をしなくてはならない日が来るかもしれないと思い、今あたり前のように平和に暮らせていることに、平和を維持していただいている政治家の皆さんにも感謝しなくてはいけないと思いました。

第2 2回平和の主張コンクール

佳作

平和な生活とは

北海道釧路北陽高等学校 3年 阿部 隼人

みなさんは、平和とはどういうことだと思いますか。私は、戦争がなく、安心して日常生活を普通に暮らせることが平和だと思います。実際にインターネットには、「世界中から紛争・戦争がなくなること」が一番多いです。次に「家族と安全に暮らせること」が多く、戦争がなく、安心安全の生活ができることが平和だと考えられます。現在、ロシアのウクライナ侵攻が約一年前から続いています。私は、世界中で行っている戦争や紛争はウクライナ侵攻だけだとおもっていましたが、他にも多数あり驚きました。例えば、アフガニスタン紛争やシリア内戦、クルド対トルコ紛争などがあります。なぜ戦争が起こるのか調べ、考えて見ました。

例えば、ロシアのウクライナ侵攻の原因は、ウクライナがNATOやEUへの加入を目指しており、ロシアはかつての帝国の復活を目指し、ウクライナを自らの勢力圏にとどめておきたく、NATOに加盟させたくなかったが、東欧諸国をNATOに加盟させないという約束を破られたのでウクライナ侵攻を行っています。戦争は、民族や宗教の争いも多くあるが、国家の自衛や利益を確保する目的としても多く行われています。

しかし、自国が戦争を行っている、国民の意見など言うことができません。それだけではなく、国家のお金は全て戦争への資金に当てられ、食料も戦争へと優先されるため、貧しい生活になるため戦争で攻められている側だけでなく、攻めている側にも悪影響になります。それだけではなく、戦争していない国も悪影響がでてきます。一つ目は、一次産品の価格上昇によりインフレの押し上げが起こります。二つ目は、周辺諸国を中心に、貿易などが混乱することや、難民流出の急増に対処する必要がでてきます。現在の日本でも、ウクライナ侵攻の影響により物価の上昇があり生活への影響も多く大変です。

ウクライナ侵攻はまだ続いています。ウクライナの兵士の死者数は去年十二月までで約一万人ほど、一般市民は七千人ほどいます。この犠牲者の中には、子どもや他国籍の人も数多くいると思います。ロシアの兵士の死傷数は十七万人～二十万人いるとされています。武力を使って人を殺し、その国を支配しようとするだけでこのだけの死傷者がでているとすごく戦争というものが怖いものだと思えば絶対にしてはいけないものと分かります。

日本にも多くの戦争があり、今があります。かつては、世界大戦があり、アメリカから、長崎と広島に原子爆弾が落とされるなど被害者数が多く、その経験から日本国憲法

の第九条には戦争の放棄があります。人間という生き物はこういったきまりがあると守
ることができます。なので日本は現在戦争がなく安全だと思います。

よって私は、今の日本のような戦争がなく安心して日常生活を普通に暮らせることが
平和だと思います。

第2 2回平和の主張コンクール
佳作

戦争のない世界をめざして

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{みはら}三原 ^{だいち}大知

昨今の世界情勢は、あまり安泰なものとは言えません。長期化するロシアによるウクライナへの軍事侵攻、アメリカと中国の貿易に関する対立、日本でも連日、北朝鮮による日本海へのミサイル発射の報道がされています。このような情勢の中で囁かれているのが、第三次世界大戦の勃発です。このような戦争は絶対に起こってはなりません。ではなぜ、戦争がおこってはいけないのでしょうか。いくつか理由を述べたいと思います。

一つ目の理由は、たくさんの人々が犠牲になるからです。現在、私たちが生活している場所にミサイルや爆弾が落とされたとしたら、数えきれない程多くの人々が亡くなります。その人がこれまで営んできた生活の全てが、これから営むはずだった生活の全てが、その爆弾によって無残にも失われてしまうからです。実際に第二次世界大戦では、日本だけでも戦死者は三一〇万人、その内民間で亡くなった方は八〇万人にも上ります。

二つ目の理由は、戦争で被った被害は終戦後もなくなるからです。戦争によって親を失った子を戦災孤児といいます。第二次世界大戦当時の戦災孤児は、一二万以上いたとされています。

ここで実際に、東京大空襲で戦災孤児になった一人の女性を紹介します。日中戦争が始まった翌年の1938年に生まれた、鈴木賀子さん。幼少期を過ごしたのは、いまの東京都江東区、北砂という町だ。ガスタンクが近くにあったことをうっすら覚えていると話すと、近くに工場などもある住宅街だった。運送業を営んでいたという父親を病気で亡くし、木造平屋の長屋に母親とふたりの姉と弟と暮らした。裕福ではなかったが、下町らしい、ささやかで幸せな暮らしだった、という。物心ついたころには太平洋戦争（1941年～）が始まっており、すでに生活はひっ迫していた。鈴木さんが六歳のころ。1944年も後半になると、本土空襲も本格化する。小学校の帰り道、空襲警報が鳴って「急いで帰りなさい」と言われたことも覚えているという。そして、三月九日の夜。夕ご飯を食べた後、家族五人並んで床について眠りについたあとのことだった。「ウ～ウ～」というサイレンが鳴り響き、「空襲警報～はつれい～」というメガホンでこもった声が、街にこだました。急いで防空壕に避難したという。「あたしは、干し芋をかじってたなあ。そしたら母と姉が『なんか今日はいつもと違うよ、これ』って言ってたんですよ。それで、母が『あたしとはつ姉（*長女、当時十八歳）はうちの大事なものを持ってあとから行くから。お婆さんのところにいきなさい』とあたしたちに言って。姉（*次女）が弟を手おんぶしてあたしは姉の洋服の端を持って走り出したの」母たちの予想

通り、その日の空襲は「何かが違った。」アメリカ軍はこれまでとは異なる空襲で、東京の街一帯を焼き払おうとしていたのだ。空襲警報の発令より三分前に奇襲した約三百機の B-29 は、下町一体に 1665 トンの焼夷弾を投下。木造家屋が密集していたことに加え、強風が重なり、巨大な火災が発生した。「お婆さんのうちにいくところではない。姉には下駄を脱げって言われて、裸足で走った。火の粉が洋服に火をつけるから、姉に言われて防火水をかぶりながら逃げたの。怖かったら目をつぶれとも言われて、いち、にのさんで火の海を突破したのは覚えている。」結果、この日の空襲では、焼死や窒息死、水死、さらには凍死などで十万人以上の方が亡くなった。そのなかには、鈴木さんの母親と、上の姉も含まれていた。

この日の空襲で賀子さんとその姉弟は戦災孤児になり、親戚をたらいまわしにされましたが、ぞんざいな扱いをされ、上野の地下街で同じ境遇の子供たちと盗みを働き、なんとか食い繋いだといいます。ですが、弟は孤児院に預けられ、十九歳の時に自ら命を絶ったといいます。厚生省（当時）による 1948 年の調査によると、孤児の総数は十二万人。養子や浮浪児、さらに米軍統治下だった沖縄の戦災孤児はこの数に含まれていません。つまり、賀子さんとその姉弟はこの中には含まれません。実際には、もっと多くの行き場を失った子供たちが日本中をさまよい歩いていたということです。

今回、戦争について調べて、改めて戦争は絶対に起こしてはいけないと感じました。今現在でも、ロシアによるウクライナ侵攻やアフガニスタンで勃発している紛争、シリア国内で発生している内戦など、世界中で戦禍にまみれている人がいます。そのような人を救うために、そのような人を今後出さないようにも、もう一度戦争や平和の意義について考える必要があると思いました。

第22回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和について

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{みやき}宮木 ^{みう}美羽

私は戦争のことについて、熟考することがよくあります。何故、異国間で争いごとが起きてしまうのか、戦争をすることはメリットがないということを理解しているはずなのにどうしてしてしまうかなどを考えたりしています。

誰だって大切に思う人がいると思いますが、戦争をすることによって、かけがえのない大切な人を失ってしまうかもしれません。大切な人は失ってしまう、戦争をすることにより街は以前とは違う姿になり、食糧や生きていくのに必要不可欠な物の不足。全くいいところがありません。二月くらいからずっと続いている、ロシアとウクライナ間の戦争はいつまで続くのでしょうか。以前、テレビをつけた時、たまたまロシアとウクライナの戦争の情景がテレビに映った時、私は衝撃を受けました。街中は荒れ果ててしまい、ひどい地域は街の至る場所で炎が昇っており、逃げる為に地下鉄のホームに避難する人などがとても衝撃でした。自分は、毎日寝ることが出来るけど、この方たちはいつ攻撃されるか分からないから安心して寝れないのだらうな。食糧も底をついてきてあと少ししかないかもしれない。小さい子どもがお母さんとはぐれてしまっただり泣いてしまっているかもしれないと考えてしまうと、何もすることが出来ない自分が不甲斐なく思います。ロシアとウクライナに住んでいる方たちの事を直接助けることは出来ませんが、今回の平和の主張コンクールに応募することにより、少しでも、誰かに私の思っていることや気持ちを分かってもらえたらいいなと思い文章にしています。

戦争は、なくそうと思ってなくせるようなものではないと思います。そんな簡単になくはきつとしません。私の意見ではありますが、優しい気持ちと他者を思いやる気持ちがあればなくなるのではないかと考えます。どういった経緯で戦争に発展してしまうのかは分かりませんが、皆優しい気持ちと思いやりを持っていれば戦争に発展しないと思います。世界中の人を変えるのはとても難しいです。なので、まず自分が変わりたいと思います。他者を思いやる事が出来る優しい人になりたいです。

今こうして私たちが生きているのは、過去に起きてしまった戦争を頑張って乗り越えた方たちのおかげだと思っています。きれいな街で過ごせるのも、安心して毎日眠ることが出来るのも、学校に通うことが出来るのも、その方たちのおかげだと自分は思っています。

第22回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{はやさか}早坂 ^{たかひろ}貴浩

ぼくは世界から戦争がなくなっていきたいと思っています。それでも昔から現在まで戦争が起きてしまうのはなぜなのでしょう。調べてみたところ原因はとても複雑ですが、一番の原因は人間の理性や感情であると考えられています。例えば自分たちの国が資源不足で苦しんでいるのとなり国は資源がめぐまれていることを知ったときに人間は「うらやましい」という感情をもつと同時に「この国を襲えば資源を奪える」という考えをもつ場合があります。その考えこそ、人間の理性が悪い意味で発現したものなのです。もちろん原因は資源だけではなく、様々な事情がありますが、根本的な原因は人間の感情によるものだと思います。

あとはお互いに自分が正しいことをしていると思い込んでいるのも原因の一つです。自分が正しいと思い込んでしまうと周りの意見を聞かなくなり、「自分がやっていることは正しいから、意見が違う人には暴力を振るっても許される」という考えにつながってしまいます。この正義と正義がぶつかってしまうと戦争になってしまいます。

その結果、太平洋戦争の日本の死者数は総数 310 万人、アメリカは約 16 万人、イギリスは約 8 万 5 千人と多くの人々が犠牲になってしまいました。

このように戦争をしてもお互いの国で多くの死者を出し、悲惨な思いをする人々を生むだけなのです。

現在は、核兵器や武器開発が進み、万が一核戦争になってしまうと第二次世界大戦よりももっと多くの被害が出てしまうかもしれません。

日本は世界で唯一、原爆を落とされた国なので原爆の恐ろしさは世界で一番理解していると思います。今でも被爆して後遺症で苦しんでいる人もいます。そういったことを防ぐために核や戦争の恐ろしさを積極的に広めていくべきだと思います。ですが未だに核を保有している国は 8 ヶ国あり、その 8 ヶ国以外にも核をもっている国があるのではないかとされています。今はお互いに核で抑止している状態ですが、もしヒートアップしてどちらかが核を使ってしまうと核戦争になってしまいます。なので戦争になる前に核の恐ろしさや平和の重要性を伝えていく必要があると思います。

それでも戦争を完全になくすことは難しいと思います。第二次世界大戦が終わってから現在までにも戦争がたくさん起きてしまっています。やはり人間である以上、自分たちとは異なる考えをもった人たちがいるのでお互いに衝突してしまいます。

そこで、異なる相手を認め互いに尊重し合うことができればいいのですが、とても難

しいことです。

なのでまずは自分の国だけでなく、異なる国にも目を向けて理解することから始めて欲しいです。